日本の商品先物市場の縮図

―パネルディスカッションを終えて―

日本経済新聞社編集局
商品部編集委員　志田富雄

パネルディスカッションの席に並んだメンバーを眺めると、現在の日本の商品先物市場の縮図を見るようでした。

各業界の代表者に参加していただいたので当然のことなのですが、商品先物市場の顔ともいえる森實孝郎・東京穀物商品取引所理事長、中澤忠義氏からバトンタッチしたばかりの南學政明・東京工業品取引所理事長、商品先物業界をリードしてきた多々良義成・豊商事会長、市場の利用者としては穀物ビジネスでの経験と知識が豊富な茅野信行・ユニパックグレイン代表、そして、16年滞在したシンガポールから東京に着任したばかりの黒田豊彦・モルガンスタンレー証券エグゼクティブディレクター。石油を中心にした工業品と農産物、市場参加者と担い手に海外の目も加え、あらゆる観点から貴重な意見を聞くことができました。

対談やパネルディスカッションでは、参加者のエンジンが暖まるのに時間がかかるケースも少なくありませんが、今回の討論会は黒田氏がディスプレーを使って海外市場から見た日本の先物市場の評価と利用実態を説明したのを皮切りに、一気にトップスピードに達しました。こうなると司会役としては逆に時間が足らなくなるのが気がかりになるのですが、各参加者に発言をコンパクトにまとめていただき、予定していた項目すべてについて活発に話し合うことができました。

国際競争力高めよ

事前の打ち合わせで各参加者を回った際、茅野代表が中国の製油・穀物業界、先物市場を視察してきたばかりと知り、ぜひ加えたかった中国の先物市場の展望についても議論することができました。今回の商品取引所法改正を受けて、日本の商品先物市場は産業基盤としての機能を果たせるか否かを迫られることになりますが、すぐ隣にはあらゆる商品の巨大な需要国として台頭し、急成長を続ける中国が自身の先物市場を立ち上げてきました。森實理事長が指摘するように、為替相場の問題はあります。一方で、先物市場の後発組として謙虚に米国などの実例を学び、国際スタンダードに合わせようとする姿勢には、先日来日したシカゴ・マーカンタイル取引所のレオ・メラメド名誉会長も驚嘆していました。

日本の商品先物市場が資産運用の場として、価格ヘッジの場としていかに利便性を高められるか。それを決めるのは国際競争力にほかなりません。手数料問題を含め、各自が前進を躊躇（ちゅうちょ）していれば中国の先物市場に飲み込まれてしまう可能性さえ否定できないのです。ただ、今回参加していただいた方々の意見を伺うと、日本の先物市場がうまく課題を克服し、中国の台頭を逆に飛躍のチャンスにできるとの希望を持てました。